

タイトル	「プランタン=モレトゥスの家屋・工房・博物館複合体」は、いかにして世界遺産になったのか？
著者	柴田， 崇； SHIBATA, Takashi
引用	北海学園大学人文論集(67)： 23-39
発行日	2019-08-31

【各論2】

「プランタン=モレトゥスの家屋・工房・博物館複合体」は、いかにして世界遺産になったのか？

柴 田 崇

英米文化学科の柴田です。

9月17日に日本を出国し、ブリュッセルを拠点にベルギー国内の数か所に行ってまいりました。到着した日は市内を散策し、二日目には、ブリュッセルから北に向かい、オランダに近いアントワープの「プランタン=モレトゥスの家屋・工房・博物館複合体」、三日目にフランスに近いトゥールネ、四日目にブリュッセルの北西にあるブルージュを訪問しました。

本日は2部構成です。第1部では、「プランタン=モレトゥス」の施設を中心にベルギー観光について報告します。第2部では、報告に基づき本学の教育と研究について考えるところをお話しします。後者についてはまだこれから深めていかなければいけませんので、忌憚のない御意見をお願いします。

まず、ベルギー観光です。

具体的な話に入る前に、前提となる「観光」という言葉を一度考えてみたいと思います。ことばの専門の先生がいらっしゃるところで非常に口幅ったいのですが、「観光」という言葉を『日本語大辞典』で調べますと、国の光を見るという意味があります。もともとは、他国に行って文物や礼節を観察し、その威光を目のあたりにするという意味だそうです。

「観光」の語は、古くはこのような意味で使われていたようですが、次第に「遊覧」の意味で使われるようになります。ちなみに、福沢諭吉の書いたものにも「観光」が見られますが、福沢の時代ですともう「遊覧」の意味で使われています。

重要なのは、「観光」が、ただ見るだけでなく、他国に行って価値を持って戻るといふ運動を伴う点です。「観光」は元来「遊覧」ではない。それから、ただ見るとか、漫然と移動し、場所をめぐるというのとも違うし、暇つぶしとも違います。

このような観光の原義を、何とか再発見したいと強く思いました。ここで思い出すのは、「洞窟の比喩」です。プラトンによれば、人々は光源を背に、洞窟の奥の壁の方を向いている。事物は、光源と人々の間でうごめいているため、壁を向いている人々はそれらを直接見るができず、壁に映った影から事物の姿をうかがい知るしかない。人々は事物の真の姿を見ているつもりでいて、実はそれらの影を見ているに過ぎない、というのが「洞窟の比喩」の出発点です。

事物の真の姿、すなわち実体と、壁に映った影とがいかにかけ離れているか、洞窟内の光源と、洞窟の外にある真の光＝太陽とがいかにかけ離れているか。哲学者たる者は、影ではなく、洞窟の外に真の光の下で事物の実体＝アイデアを見なければならない。それだけでなく、真実を知った後の哲学者は、再び洞窟に戻り、洞窟の中にいる人々に本当のところを知らせなければならない。つまり、共同体に実体についての知を伝えるという役目を、哲学者は担っているのです。

観光についても、このような運動を伴い、影ではなく、実体をつかんで戻ってくる行為であるべきだ、というふうに考えたいのです。

観光地に行くと、どこにでも売っているようなクッキーを買って帰ったり、押してある印影が違うだけのまんじゅうを買って帰ったところで意味があるのか、まことに疑わしいと言わざるを得ません。

前置きが長くなりました。ベルギー観光の話を始めましょう。

滞在二日目に参りましたアントワープです。中央駅やグレン広場が有名ですね。フランダースの犬の最後の場面で知られたノートルダム大聖堂の中には、ルーベンスの絵がかかっています。ステンドグラスも大変美しい。



徒歩で移動し、「プランタン=モレトゥス」の印刷博物館に着きました。思ったより小さな建物ですね。世界遺産の表示が壁に掲げてあります。

オランダ政府観光局のホームページでは、ルネッサンス及びバロック時代に遡る現存する最古の産業印刷の工房である、と紹介されています。16世紀半ばに工房を創業したクリストフ・プランタンと、プランタンの後継者モレトゥスにちなむ名称であること、当時のアントワープが、パリやベネチアと並んで世界の印刷の最先端を行く都市であったことがわかります。



さて、「プランタン=モレトゥス」の歴史的な意義を理解するにあたっては、いくつかの前提知識が必要です。

まずは、15世紀のヨハネス・グーテンベルクの業績について最低限の知識を持たなければなりません。活版印刷の発明者グーテンベルクの印刷物のなかで最も有名なのが『42行聖書』です。世界で初めて印刷された聖書とされています。現存する49冊のうちの1冊が日本にありますが、御存じでしょうか。慶應義塾大学が所有しておりますね。

グーテンベルクについてももう少し詳しく説明しましょう。生まれは1400年頃です。頃、というのは、裁判記録から推測して大体このぐらいだろうと推測できるからで、実は正確な記録は残っていません。

マインツの貴族の家系に生まれましたが、働かなくて済むような種類の貴族ではなかったようです。宝石の研磨や鏡の製造に携わり、早くも1539年頃には印刷を試みていた模様です。1450年にマインツの実業家のヨハン・フストと聖書印刷の契約を結び、こうして出来上がったのが『42行聖書』です。

ただし、完成の間近になって印刷用の機械の整備や用紙の購入のために前借りしていたお金が返せなくなり、フストに訴訟を起こされて負けてしまいます。敗訴によって、完成した『42行聖書』の所有権はフストのそこ

ろに移ってしまいます。グーテンベルクのその後の生活は非常に寂しいもので、失意のうちに亡くなったと言ってよさそうです。栄光からかけ離れた人生だったのは確かです。

言うまでもなくグーテンベルク以前の本は写本です。写本は基本的に一点物です。というのも、写本が流通するには正本から手書きで写し取って新たに本をつくるしかないわけですが、書き写していく間に書き間違いがあったり、中には途中で写すのをやめしまったりで、正本とは少し、場合によっては相当違う「オリジナル」な代物が流通するのが通例だったからです。使用言語は主にラテン語で、ギリシャ語の本もいくらかあったようですが、いずれにせよ普通の人が簡単に読めるものでなかったことに変わりありません。しかも一点物ですから非常に高価です。ふらっと店に立ち寄って買うというわけにいきません。まず書籍業者に本を注文します。すると書籍業者は注文を受けた後に写字をする職人を雇い、正本から一字一句違わぬように書き写させて、ようやく本が出来上がります。本を買うには相当の時間を要しました。

ラテン語が読めないと読者になれません。また、本の多くは主に修道院に所蔵されています。ある修道院に読みたい本が所蔵されていると分かったとしても、気軽に借りられるわけではありません。今で言う閉架式です。し、閲覧するにも相応の理由が必要でした。写本の時代の「知」は集積されていくものであり、かつ秘匿されるものだったと言われる所以です。

この状況が、印刷技術の発明を境に激変します。本といえば当然写本ではなく印刷した本になります。印刷した本の最大の特徴は複製品であるということです。全く同じものが無限につくれる時代がやってきたわけですね。使用言語にも変化が生じます。この時期、新しい産業が発達し、豊かな中産階級が育ちます。潜在的に大きな市場ができたことを察知した印刷業者が、普通の人でも読める俗語で書かれた本を作り始めます。いわゆる行政俗語で印刷されるようになった本の市場をもとに国民国家が形成され、行政俗語が国語に収斂していくわけですが、この話は省略します。

「知」のあり方も大きく変わりました。グーテンベルク以降、「知」は公

開され、拡散されるべきものになりました。この流れに掉さず効果が「プランタン=モレトゥス」に代表される印刷業者によってもたらされたというわけです。



博物館の中庭です。それほど広くありませんが静謐で大変美しい空間です。創業者のレリーフが誇らしげに飾っています。



モレトゥスのレリーフもあります。

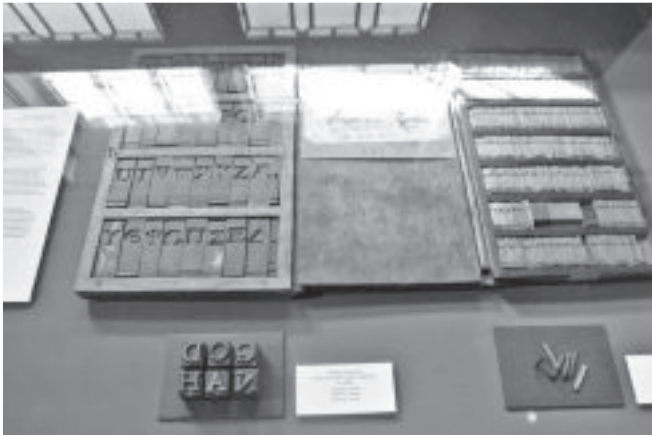


博物館の1階にはたくさんの印刷機が置かれています。ブドウの圧搾機をヒントに発明されたという史実を裏付けるように、ねじを回しながら上から強い力をかけ、活版を紙に押し付ける仕組みが見て取れます。最初は4台だったものが、最盛期には16台ほどに増えたと説明されていました。





2階に上がりますと、印刷に至るまでの工程を詳しく伝える工夫が見られます。



まず、このような展示があります。一見してこれらの板が何なのか、素材が何かも想像が付きません。続く展示には、クロード・ギラモンという名のパンチャーがいたこと、パンチャー、パンチ、マトリックス、ファウンドリータイプという語の理解が謎を解くカギとなることが分かりま

す。ここですかさず、活字の作り方の説明があります。



この図によると、まずパンチャーは、例えば「D」の文字を比較的に近い金属に彫り、パンチ（父型）をつくります。次に、パンチを比較的軟らかい金属に打ち込み、マトリクス（母型）をつくります。第三段階でこのマトリックスに鉛等を流し込んでできるのが、ファウンドリータイプ（鑄造活字）です。考えてみれば当然ですが、いきなり活字を彫ってはいは、効率的でないだけでなく、一つ一つの活字に違いが出てしまいますね。印刷本以前に、まずは印刷のための活字自体が複製技術の産物だったわけです。

この知識をもとに最初の展示の左側に並んだ板を見ると、なるほど、鏡文字になっていない理由が分かります。これらはマトリクスなんですね。つまり、鉛を流し込んで活字を作るための金属の母型です。

続いて、パンチ、マトリクス、タイ



ブをつくる工程の説明と、実際に使用された数多くの工具類が展示されています。



この後に、同館が所蔵する貴重な本の展示があります。



これは写本です。色彩豊かな本ですが、すべて手書きです。

これ以降は、当時の歴史についての少々の知識がないと、展示物の意味

が分からなくなると思われます。実際、社会科見学で連れてこられたと思しき小学生たちが、この辺りから展示品を見るのに飽きてしまって、博物館の廊下を走り回っていました。どの国でも一緒ですね。基本的な知識と解釈のフレームがないと、この後の展示物の意味を理解するのはなかなか難しそうです。逆に言えば、歴史の知識をもとに現在の自分と展示品を関連付けられれば、価値ある時間がやってきます。

ちなみに、私が採用した解釈のフレームは次のようなものです。印刷技術は複製のための技術であり、俗語で書かれた本を大量に誕生させた、その結果、知の開放と拡散に貢献しつつ、印刷技術に基づく新しい文化を生み出し、社会構造を大きく変動させた。こう考えると、展示の始まりに写本が置かれているのは、複製技術の前の時代の技術を象徴するためだと解釈できます。写本に基づく独特な知の在り方が存在し、やはり独特な文化をつくり、独自の社会構造を構築し、維持していたのです。

これも専門の先生のいらっしゃる前で大変恐縮ですが、宗教改革の歴史を、印刷技術の登場から説明することも可能です。一言で言うと、印刷技術は、カトリックがつくった社会体制の破壊に大きく貢献しました。宗教改革が実現した背景には、写本の技術から印刷技術へのシフトによって、改革を進めるための「知」がスピーディーに、かつ広範囲に伝播したことがありました。カトリックの共同体に代わる新しい共同体を構築するのにも、印刷技術が関わっています。新しい共同体は後にネーションステート、つまり国民国家と呼ばれるようになりますが、印刷技術の影響力に言及せずに、国民の意識の形成過程を説明することはできません。

「プラントン=モレトゥス」の業績も、「出版資本主義」という概念で整理することができます。印刷物を商品として生産し、流通させる業者の登場によって、消費者としての多く読者が生まれましたが、同じ内容の書物の読む行為は、直接会ったことはなくとも想像によって形成される連帯感、平たく言えば仲間意識を読者の間に芽生えさせました。この仲間意識の先にあるのが、ネーション（民族、国民）の意識です。

このように技術の変化と文化の形成を連動させて考えるのが、私が専門

にするメディア論の特徴です。

メディア論では、技術を使いこなすには特有のスキル（リテラシー）が必要になることに注目し、技術の転換によるリテラシーの変遷を縦軸に、歴史をいくつかの時代に区分します。

メディア論の成果を一つ上げれば、時代が変わる境界期になってみて初めて、これまで自分たちがどっぷり使っていた文化が一体何であったのかが見えてくる、可視化される、という指摘があります。境界期にかかる前の安定した時間の中で、自分たちの文化が絶対的なものではないという意識を持つのは困難です。境界期になって、時代が変動し始めて初めて、自分たちの文化が相対的なものだ気づくのです。しかし、来たるべき新しい文化の姿がすぐに理解できるわけではありません。しばらくは混沌の状態が続きます。新しい時代はどちらに向かって進んでいるのか、新しい文化に適應するために自分たちはどのように振舞えばよいのか。いずれにも答えを出せない混沌の状態です。メディア論とは、このような歴史観で過去、現在、未来を見通す学問です。

ここでメディア論を興したマーシャル・マクルーハンの仕事を簡単に紹介しておきましょう。マクルーハンは、技術の産物たる人工物の秩序を「銀河系」と表現しました。ゲーテンベルクによって始まった人工物の秩序を研究した成果が主著の一つ『ゲーテンベルクの銀河系』です。マクルーハンは、ゲーテンベルクの銀河系の可視化が可能になったのは、19 世紀の終わりころに新しい技術が登場したからであり、現在は、古い文化が新しい文化に移り変わるさなかだと考えます。

文化の遷移は、パラダイムシフトとも言い換えられます。現在はパラダイムシフトによる混沌の時期である、それ故、まずは新しい技術の特徴を理解した上で、新しい文化に適應しつつ人間らしい生を送るためにはどのように対処すべきかを考えなければならない。マクルーハンはこのような認識を持っていた人物です。

ではメディア論の知見を踏まえ、転換にともなう混沌、そして混沌のさなかの人々の狼狽ぶりから見えるアイロニーをキーワードに展示品を説明

してみましょう。人間は時代をつくる主体でしょうか。そうとは言えません。混沌の中にある人間の行動はまことに心もとなく、時代に適応したかと思えば逆行するような行動をとってみたい、全く一貫性がありません。自分の手足、あるいは従僕のように使っていると信じている技術や人工物に翻弄されている様子を見るにつけ、人間ではなく道具の方が主人であり、力強く時代を形成しつつ、人間たちを弄んでいるようにさえに思えます。このような事態はアイロニーと言うしかありません。

グーテンベルクも例外ではありません。カトリックの社会構造を破壊することになる印刷技術の発明者として歴史に名を刻む一方で、『42行聖書』を印刷する前には悪名高い免罪符の印刷も請け負い、カトリックの体制維持に加担しているのですから。

展示に戻りましょう。展示品の中に印刷された聖書があります。



説明文の見出し「36行聖書 バンベルク 1460年」にあるように、よく見ると36行しかありません。説明文の本文には、「ヨハネス・グーテンベルクの活字で印刷された二番目の聖書である」とありますが、グーテンベルクが印刷したものではありません。グーテンベルクから活字セットを買い取ったバンベルクのアルブレヒト・プフィスターの工房で製作されたと

というのが通説です。フストに裁判で負け、1455 年に『42 行聖書』を含めて機材の一切合切を手放した後も、グーテンベルクは細々と印刷を続けてたようです。しかし、聖書の印刷に直接関わることはなく、『カトリコン』（万能薬）などが代表作として伝わるのみです。「グーテンベルク」ではなく、「グーテンベルクの活字」が『42 行聖書』に続く聖書の印刷をしたというのもまた、皮肉なことです。

また、「プロパガンダ」という見出しで展示されている資料もありました。プロパガンダとは、現在は一般的に「政治的な宣伝」と理解されていますが、もともとはカトリックの用語です。カトリックの布教のための機関や、布教活動をプロパガンダと呼びました。プラントンは、「プロパガンダ」に関する印刷を請け負っています。この印刷物には、ジョバンニ・マッテロ・グリッロという人物の改宗の記録が載っています。一体何者なのか、帰国後、調べてみたものの結局分かりませんでした。当時、それなりの有力者であったと推測されます。資料は、カトリックを信奉していたこの人物がカルバン派に転向し、そこからもう一度カトリックに戻ってきたこと知らせるものです。このような事例をカトリックが重視し、「プラントンはモレトゥス」がその印刷を請け負いました。新しい時代を推し進めたとの評価がある印刷産業の雄が、時代を過去に引き戻そうとする活動に加担していたのです。

教皇からの祈祷書の印刷にかかる許可書、公的機関からの権利付与の証書なども展示されていました。極めつけは、いわゆる禁書目録の印刷ですね。プラントンは、スペイン王フェリペ二世からの命令書に従って、人文学のヒーローとも言うべきエラスムスの著書の部分的削除を指示した目録の印刷を請け負いました。

さらに、典礼の言語をラテン語に限定する「トレント会議の命令」の印刷も請け負っていたようです。

また、プラントンは、『対訳聖書』の印刷をライフワークにしていました。しかし、パトロンからの注文を優先せざるを得ず、『対訳聖書』の印刷が滞ることを非常に残念がったことも、展示資料から読み取れます。営利と理

想を天秤にかけざるを得ない企業経営者の悲哀を感じます。

念願の『対訳聖書』は、遂に 1572 年に完成します。見開きのページの上
部中央にラテン語の原文を据え、ページの左側にヘブライ語の対訳、右側
にギリシャ語の対訳を載せ、ページの下部には右側にラテン語の原文、左
側にアラム語の対訳を据えた不思議なレイアウトです。



『対訳聖書』を完成させた後も、顧客のニーズに翻弄され、時代に翻弄され続けます。例えば、ローマ・ミサの典礼書を印刷したところ、オランダ独立戦争が勃発して輸出がストップしてしまいます。プランタン最晩年の印刷物が、カトリック信徒のためのハンドブックだったのも、皮肉と言え
ば皮肉です。

以上が二日目の報告です。

三日目に訪れたツールネの見どころは大聖堂です。人があまりいないのに喜んでいると、大聖堂が見える頃にその理由が分かりました。残念ながら現在改修中です。フランスとベルギーにまたがる地域に点在する鐘楼群を含め、多くの建造物が世界遺産に認定されています。四日目のブルー
ジュの鐘楼群も世界遺産の一部です。

では、第2部に入ります。教育と研究の観点から「プランタン=モレトゥス」の展示の仕方について何か提言ができないか、持ち帰った価値を教育

と研究に生かせないか、考えてみました。

「プランタン=モレトゥス」が世界文化遺産に登録された際の評価書類には、16 世紀のヨーロッパのヒューマニズムにとって非常に重要な施設、とあります。エラスムスの著書の検閲に加担していたことが思い出されますね。

世界遺産条約 4 条には、文科省の仮訳に拠ると「認定」「保護」「保存」「整備活用」「伝承」が義務づけられています。ここで、あまり聞き慣れない用語かもしれませんが、「文化資源学」に基づく思考を提案したいと思います。世界遺産から学びつつ、将来、例えば観光に活用するという場合にヒントを与えてくれる思考法ではないかと考えます。

現在、いくつかの大学に文化資源系の学科や専攻や、文化資源センターの類の研究機関が設置され、文化的価値の探索・活用・発信、あるいは発見・評価・利活用を使命に掲げています。

文化資源学の大本と目される東京大学大学院人文社会系研究科の文化資源学研究室のホームページでは、文化資源学をこのように規定しています。「人間が生み出すさまざまな文化を、既成の観念や既存の制度にとらわれず、『ことば』と『おと』と『かたち』を手掛かりに、根源に立ち返って見直そうとする姿勢から生まれました。多様な観点から文化をとらえ直し、新たな価値を発見・再評価し、それらを活かしたよりよい社会の実現をめざす方法を研究・開発しようとするものです」。一般的な専門的研究と比較すると、深化に対する横断、個別の専門スキルに対する共通の方法、を提案する学問であるように読めます。本学部の研究と教育に引き付けて考えても非常に示唆的です。別に観光学部を名乗るとか、観光学科をつくらなくとも、現在あるいくつかの群を柱に見立て、文化資源学を梁のようなものと見做せば、観光の問題を学問的に取り込むことができるのではないかと、そう思い至りました。

専門分野の研究と教育が縦方向に深化するものならば、文化資源学的思考は、横断的な共通の方法であり、両者が競合することはありません。また、専門が違うから何も申しぬというかたくなな姿勢を捨て、必要なら少々嫌な顔をされようとも他の領域に越境して発言し、連携するのが許容され

るきっかけにもなるでしょう。六つの群を擁する本学部には六本の柱があります。観光を文化資源の観点から捉え直し、資源の利活用を考える思考を採れば、六本の柱が横につながり、より風通しがよく自由な学部になると期待します。

「利活用」という言葉を使うと、商業的な意味に取られる傾向があるようです。しかし、この語を文化資源学的な思考で捉え、その意味を人文学部なりに敷衍すれば、もっと建設的な意味で使うことが可能です。観光資源の観点で文化的価値を発掘し、その発信・表現・提言の仕方を工夫して、観光客がよりよく活用できるかたちにすること。このような活動であれば、学部の研究や教育に取り入れたとしても少しもおかしくありません。

観光の在り方について何か申し上げることがあるとすれば、まずは「よき観光客たれ」と言うべきでしょう。単に行って帰ってくるだけではなく、何らかの価値、観光資源の本質を持ち帰るには相応の準備が必要です。これはよき観光客たる条件です。

さらに、こういう言葉はないと思いますが「よき観光主たれ」とも言いたい。観光主を定義すれば、観光事業の主体にして与益者である、と言えるでしょうか。観光客が客体にして、受益者であるのに対応します。観光主とは、第一義的な文化遺産の相続者として、観光客の価値の探索に供すべく、文化資源を整備する義務を負うものと考えます。

人文学部は、北海道私学の雄を自認する大学の一学部にして、道内の職場に就職を希望する学生が多く、かつ就職希望者のうち英米だと約4割、日文だと約2割が観光業界をめざす学部です。実際に観光に関連する会社に就職するのは希望者の4割程度ですが、それにしても他学部に比べて観光業界と深い所縁があるのは確かです。人文学部の教育の一部に「よき観光主」になるための工夫があっても少しもおかしくありません。観光資源に恵まれ、観光を産業の核とする北海道の未来には、「よき観光主」の育成が急務です。その責務をもっともよく担い得るのが本学部ではないか、そのような考えを、ベルギー観光で手にしました。

時間ですのでこれで終わります。